二〇二一年一二月一八日

結びたる口に寒紅死化粧　素秀

己が囲に縋りしままに蜘蛛凍つる　うつぎ

寒禽の賑はひ森に一頻り　わかば

招き揚げ京の師走の幕上がる　凡士

土の香のまだ新しき猪の跡　うつぎ

いただきし鰤一本をもてあます　凡士

雀どち上を下へや大冬木　はく子

鴨浮寝メタセコイヤの濃き影に　はく子

マスクして声なき葬や灯の冴ゆる　なつき

家計簿に一筆主婦の日記果つ　なつき

大公孫樹撒き散らすごと黄落す　はく子

恙なき偕老謝して年惜しむ　宏虎

薬食ひ尽きぬ獣害話かな　よう子

昔日の渡し場跡に枯尾花　むべ

大公孫樹枯れを尽くして仁王立　うつぎ

境内に並ぶ落葉の袋詰め　こすもす

廃校跡子らの声無く枯れすすき　よし子

冬の朝水平線の模糊として　わかば

言ひ訳の嘘とわかりし息白し　よし子

涙染みひとつ蒲団に寝ずの番　素秀

ゆくりなく山門脇に冬至梅　愛正

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年一二月一九日